

『楠都』

（万日山の誓い・熊本の光と影の青春）

第一卷

森山 光成

『楠都』^{なんと} まえがき

一 『楠都』は、楠の木の繁る熊本市で、主人公の秀彬が“自分がこの世に生を受けた意味は” “人生とは何か” “人はどう生きるべきなのか” “人間の死とは何か” “人が死のゲートを通過した後どうなるのか” “愛や性とは何なのか” “何故に一般人が全く望まない戦争があるのか” “目の前にある物質の世界とは何なのか” “目に見えない世界はどういう世界なのか” について正面からぶっつかって行って、回答を得ようとする姿を描いた作品です。著者は、それらの課題に対し、逃げず、真剣に、秀彬の生き方に向き合って、作品をものにしました。

秀彬は魅力的で清潔、秀彬に接する周囲の女性たちに爽やかな余韻を響かせる青年です。中学一年生の時に“作家に成る”と志した秀彬は周囲の人々に対し（この出会いを持った男の人や女の人）は何か吸収すべきものを持っていると感じると、積極的に交友する態度を持っています。また、常に自分の中に問いを持ち、それに向かって、答えを見出そうとして、苦闘しながら成長していきます。『楠都』は、一種の、主人公の秀彬の、魂の闘いの記録です。

二 『楠都』の出版を前にして、最終巻・第六巻に出てこられる木内鶴彦さんが、ついこの前、二〇二四年十二月一日夕刻に逝去されました。ご冥福をお祈りします。今回は、遂に帰って来られませんでした。ご家族のお話によると、“骨折されて入院、ベッドに長く動けずに寝ておられた間、お体が非常に弱ってこられた。身体がついてきてくれな

い状況になっていた”ということ、木内さんの秀れた魂を、お身体がサポートできない状況で、とうとう帰って来られなかったのです。“木内さん、さようなら”。お別れの言葉を捧げます。『合掌!!』

旅立たれた日、著者は、前後して米国訪問中で、お通夜にもお葬式にも出席できませんでした。訃報を聞いた時、オレゴン州のポートランドにいましたが、陰ながら、『ポアの行』を熱心に唱え、謹んで、木内さんの魂に、奉げさせて頂きました。

三 木内さんとは、初めの頃は、講演会の質疑を通して詳しい内容に触れたり、二次会で繰り返してお話を聞いたりでした。その後、著者の『楠都』の作品執筆のための質疑応答の為に、何回か、佐久や東京で、個人的にお会いしていました。その後、著者が、健康維持の為に通院していた“空海の行を修められていた、僧籍で、『業捨』の命名を創始された谷原弘倫先生により、空海の行と名付けられた”不思議な術の前橋施術所に、毎月、御一緒するようになりました。

木内さんが体調を整えられるために、業捨を始められたのは、『業捨』の不思議な力に、(一試す価値あり)と考えられた約七年前からです。著者の連れ合いの、寝ても立つても座っても、激痛が走っていた腰痛が、初日の施術後、帰宅前に完治して以来、お世話になって、前橋市朝日町の業捨の神原徹成先生の施術と一緒に受けられることになりました。神原徹成先生は、創始者谷原弘倫先生が、唯一お弟子さんとして認められた『業捨』の施術者です。木内さんが初めて『業捨』の施術を受けられた時の“全身の手当てした箇所は皮膚の下に、ドス黒くも赤く浮き上がってきた老廃物の色の凄さ”に、ご本人も私共も、ビックリした覚えがあります。

毎月一回、業捨のあとに、高崎や前橋の利根川べりの、高い岸边にある美しい緑陰の風景の広がる料亭で、春夏秋冬、私の家内共々、必ず、昼食と一緒に摂る習慣になりました。余程遅くならない限り時間制限もなく、何時間でも、心ゆくまで、質疑応答の間が続きました。講演会では質疑できなかつた件について、色々に違った言葉を使って、思い違いないように理解に努めさせて頂いた話の連続でした。

頂く懐石料理を堪能しながら、その場で、それまでの、最初の著書の『宇宙の記憶』の更なる内容について、また、私共が疑問に思った内容について、各地での講演の内容や、チャイナでの二度目、三度目の心肺停止になられた時の状況などについて、再度お聞きし、内容確認の為の質疑応答が繰り返されました。ですから、この作品にも、色々な処で講演された内容が、再度出てきている場合があります。

色々なお話を済ませ、食事を終えると、高速道路を飛ばしながら、帰途につきました。リフトアップしてでっかいタイヤを付け、はみ出した幅をモールでカバーし、更に前部や後部には、雪の多いロシアで多くの車が付けている追突対策の頑丈なブル・バーで保護し、タンクのように安全性を高めたランクルで、時には那須にも来て頂きました。木内さんもこのランクルに乗られるのが、大好きでした。元々若い時から、木内さんは、凄い馬力の車に乗られるのが大好きな方でしたので。

当社は、『宇宙の記憶』へそのきおくの版權を頂いています。『宇宙の記憶』については、二〇二五年現在、今後、漫画化、アニメ化、各国語に翻訳予定です。著者は『宇宙の記憶』の内容を含めて、多岐にわたり木内さんからお話を聞くことができました。

特に、チャイナでの皆既日食観測のインストラクターとして行かれたときの、ドクタ

―たちの目前で、心肺停止になられた、二回目、三回目の死亡体験についての追加のお話も、詳細にわたって聞くことが出来ました。奥様がお付き添いで、ベッドサイドで見聞きされたことを、後でご自分でも聞きとりされ、数多く撮られていた写真を見せられもし、自分でも、鏡で手術後の腹部の状態をご覧になっていました。それ以来、覚えておられた内容を、微に入り細に入り、聞かせていただきました。本ものの、死亡体験者のお話は、著者を震撼させる内容でした。臨死体験をした主人公の秀彬の意識の旅の内容を、検証できるいい機会でした。

四 『宇宙の記憶』の文庫本版に、少々誤字があり、その儘にしているは不愉快なので、あえて、全て廃棄処分しました。海外出張などで、多忙を極めていた時分に、編集ソフト等を使って、もう少し添削し直せば、簡単に改定でき、内容的にも、直ぐに類推できる文字で、大きな誤解を招く内容ではありませんでした。添削を十分にできない多忙の中で印刷していたのですが、気分的に自省の念も含んだ「嫌悪感」があり、思い切って、切り捨てました。資源の無駄遣いでしたが、これも、「些細なことをあげつらう輩に負けないように、将来は、ちゃんとしなさい」という、何らかの、天の啓示と捉えた上での決行でした。スツキリしました。

へ処分する前に「誤字がありますよ、それでもご購入で良いですか」と言ってご了承頂き「お買いになりたい読者には、限られた数ではありますがお分けしました。お求め頂いた方には、希少版になりました」。

前の文庫版の内容に加筆して、近い将来、『宇宙の記憶』の増補版を出版する予定であります。『宇宙の記憶』は、木内さんが、臨死体験の後、ラジオ放送で内容を話され

てから、初めて出版された重要な著書であり、木内さんが、これが“原点です”と言われている著書です。今後ハードカバーの単行本も再出版する予定です。

五月に一回、業捨の後の木内さんとの話し合いは、約六年以上続きました。その間、何十回かの質疑を繰り返したになりました。その際の、木内さんとの、この一種の内容確認の打ち合わせは、興味深いもので、考えを深めるには絶好の機会でした。

まだご健在の頃、木内さんがおっしゃっていたのは、“私たちは、五次元の世界、即ち、意識の世界から来ているんだよ。意識の世界は、私たちの故郷だ”と、仰っていました。それは後に述べる、『オアスプ』というジョン・ニューブローによる自動書記で書かれた内容と、同じものを含んでいました。

それ以外にも、東京でお会いして、又は、佐久にお邪魔し、木内さんとお話しできました。心から感謝いたしております。最初に佐久でお会いした時のことをよく覚えています。あれは雪のちらつく寒い日でした。あれ以来、長い月日が経ちました。

臨死体験、いや、死亡体験について、著者は、感覚的に非常に身近に感じるようになった昨今です。これから世界中の、木内さんを知らない人たちに、書籍（翻訳）や講演（通訳付き）を通じて、更にご紹介し、ご活躍を期待して、色々と計画していました。叶わぬ事となりました。

木内さんの生涯は、“非常に密度の高いものだった”と、思います。ご家族の奥様や息子さん、お兄姉さんたちから見ても、そういう感懷を持たれる木内さんでした。小さい時から、ご家族からも“鶴ちゃん”と呼ばれて可愛がられていた木内さんでした。皆さんから好かれ、どなたからも敬愛の気持ちに満ちた眼差しを持って見られていて、多

くの方たちから親しまれていた木内さんです。何か、替え難いかったが、今回は、とうとう、死と言うゲートを通過し、逝ってしまわれました。もう、帰って来られないのです。

二〇二五年の三月十四日に行われた「木内鶴彦さんを偲ぶ会」にいらっしやっていた、見える方によれば、「木内さんは、既に、スサノオの処へ行かれて、地球の為に一緒に働き始められた」と言うことです。「そのご発言がどういう意味を持つか」木内さんはお見通しでしょう。私たちも、命のある限り、全力を尽くして、何か、自分が人生を賭けるものに命の火を燃やし続け、奉仕し尽して、この世に「おさらば」したい、と思っています。

木内さん、いずれ、私も参ります。その時、お会いしましょう。でも、既に生まれ変わられて、産声を上げておられるかもしれません。

既に、膨大な意識と一体になられて、その後、どうなられたのか、どういう風にすれば個としての木内さんの魂にお会いできるか、まだ、解りません。そのうち「こうすりや会えるんだよ」とインスピレーションを送っていたこともあるでしょう。私の霊性が真に向上した時に限り、自分の中で育てた思い込みでなく、真の霊的な再会を生きている間に、持つ事が出来るでしょうか？ 改めて、木内さんのご冥福をお祈りします。

六 戦後、荒れ果てた日本が復興していく中で、多くの若者が、いかに純粋に、誠実さをもって生きぬくか、必死に模索しながらヘッセの『데미アン』やリルケ、シュタイナー、ラジニール、コリン・ウイルソン、T・E・ロレンス、ゲーテなどの書を読み、努力している姿を知りました。それらの多くの方々とお付き合いをしていました。本当に純粋に、誠実に生きようと努力するひた向きの姿勢を持った方たちでした。著者もその

一群の一人として生きたい、と願ひ、努力してきました。作品の中の主人公の秀彬も、（そのように生きたい）と願ひながら、力を尽くして努力します。「生と死」は、秀彬にとつても、重要な課題でした。その姿を描きながら、著者自身も、秀彬の真摯な姿勢に励まされながら、作品を書き続けてきました。

七 秀彬二十歳の時でした。故郷、熊本市の、今は、熊本駅の新幹線出札口のすぐ西にある、約百mの標高の花岡山、続いて、峰続きの万日山の頂上に満月の晩に登りました。仲秋の名月の、心地よい秋風の吹く夜陰の中、自分の魂を呼ぶような青い月光に誘われてのことです。初め、名月の宴を愉しんでいる人たちが騒いでいる光景を見ながら、花岡山の頂上でベンチに座っていました。青春の真ただ中において、熟考すべき多くのことにつき思索を重ねていたのです。名月の宴に浮かれています。人々が去った後、木剣を手に、青白い月光に浮かび上がった寂しい山道を抜け、尾根続きの万日山に向かいました。

名月に照らされ、峰のススキの銀色の穂の波が秋風を受けて音を立てて靡いています。頂上に着くと、足下の千畳敷のススキの原は、秋風に吹かれ、十重二十重に波打っている。青白い月光に照らされ、秋の虫の音の集みや風の音も混じり自然が交響曲を奏でている光景は、歓喜に溢れた自然の演奏でした。

秀彬は、月光で銀色のススキが波打つ原を見渡せる頂上に座り、月影に青白く照らされた天空や、眼下の平野を眺めていました。心地よい秋風に吹かれながら徹夜で過ごし、西の有明海を金色に染めながら沈んでいた満月を見送ります。黎明が過ぎ、旭日旗の

ように光芒の筋が天空を赤や紫を湛えた様々な色に染め上げていくまで、まんじりともせず、木剣を抱えて、色々と将来の事を考えていました。

時が過ぎ、黎明も去り、朝日が阿蘇の山脈から登って来た時、身体全体に鳥肌がたつインスピレーションを受けました。秀彬は、ブルブルっと体を震わせました。それは、今まで何の変哲もなかった「万日山」と言う名前を持つ山の主が、秀彬に語りかけてきたものでした。その時の光景を秀彬は、何万日の年月、決して忘れることはありませんでした。

「お前の前に、今から、私の名前のように万日と言う修行の日々の山が待っている。その山を越えていく修業にお前の人生をかける。お前の命をかけるのだ。万日をかけて、第一に、合気道の修行を続ける、第二に、万巻の書を読んでいく。第三に、かつて抱いた『作家として世に出るという志』を貫徹させる為に、原稿を書き続ける。」

だが、万日を迎える前には、原稿を発表はしない。お前はそれらの作品で作家としての名声を得たり、収入を得たり、したいのではない。万日と言う年月は、お前の命をかけ、自分の人生を賭けてやり抜き、自分の人生の証しとなる作品を残そうという「万日の誓い」の元に、芸術修業の道程を歩いて行く日々なのだ。厳しく長い年月と言う烈火を宿した坩堝で焼かれ鍛えられ、結晶としての芸術作品を生んでいく修業の道だ。

それまでは、生きていく為に専門の職業を持ち、それを軸に生活を送っていく。家庭を持ち、伴侶や子供たちと一緒に人間として様々な現実の人生を経験し、一人の人間としての経験を積んでいく。其の軸の周りに、先に述べた、自分がやるべき第一・第二・第三のことを回転させて毎日を送っていく。そういうやり方に人生を賭け、思ったよう

に過ぎていくのに悔いはない。万日が一万日か二万日か、誰にもわからない。天だけが知っている。だが、お前は与えられた寿命を使い、それを貫徹するよう、自分の命を燃やし続ける”と。

それ以来、秀彬は、ひたすら、その志に従って人生を歩んでいきます。全ては、作品を完成させるための肥やしになっていくのです。

八一九九四年に、この『楠都』の入門篇である『絆』という四百字原稿用紙約五百枚の作品を書き上げていました。アメリカ在住時に、一万日を迎えたので、一つのケジメとして、日本に原稿を送り、熊本市で発表しました。熊本日々新聞で、近代文学評論家の教授の先生からは、約十五cm×縦二十cmという欄の紙面の、かなりのスペースを割いて、好意を頂いて批評された記憶があります。『三田秀彬の大作、万日の修行を志すこの作家に続け』と、他の小説を書いてる男女の作家を鼓舞する内容でした。

だが、正式な商業本にはしませんでした。一万日を経過した後、一つの道程のケジメとして発表したこの作品の『絆』では、欠けたものがあったのです。中学を卒業した後、二十五歳までの青年期に差し掛かる秀彬に起こったことについては、簡単に触れ、その後どういう風に人生を送ったのか、具体的には殆んど書きませんでした。それは、大きな欠落でした。余りにも秀彬の辿った道の内容の密度が高く、重いテーマが多くて、簡単に書ききれarるものではなかったからです。

一人の少年が青年期に差し掛かるまでの年月は、その人間にとって、人生の基礎を築き上げるために奮闘していくべき年月です。それらについて、例えば話を入れながらも、主人公の秀彬を通じて、作品が何を描こうとしているか、その真意を反映させ、全貌を

表現しつくすには、歳月の経過を経ての熟成が必要でした。

初めに書き上げた入門篇の『絆』では「我」が確立された中学生になった秀彬が、それ以来、どう生きたか、一人の若者が、どういう人間になったか”については、長くなりそうですし、描いていませんでした。それでは、秀彬が通って行った青春の本質的な部分、読者には見えません。大人になっていく過程の、その後の大事な青春の日々をどう送ったか、サラッと触れた程度でした。実際の文章は、「秀彬は、その後、成長するにつれ、幾多の経験を経ながら、充実した青春を送っていった」とだけ、書いておきました。

直ぐに、本編たる『楠都』を上梓しなかったのには、他にも、理由がありました。作品の中に書いてありますが、リルケが言った、次のような内容の言葉があります。全く同じ表現ではありませんが、意味するところは、ほぼ同じです。

「作家は、己の存在をかけ、人間として味わう、多くの出来事に直面しながら、長い年月を生き抜き、出来るだけ沢山の経験を、身をもって体験しなければいけない。だが、それだけではいけない。それらを全て忘れてしまつて、もう、夢の中にも、出て来ないように忘れてしまわなければならない。そういう年月の果てに、いつか、自然に、ふつと出てきた初めの文章、詩の一節が、その作家の本当の血となり肉となつてマグマのように作家の存在の内部に埋め込まれた本質、その内部の深いマグマから噴き出てきた、最初の芽吹きなのだ。作品というものは、そういう風に、全ての経験を忘れてしまつた後に、自然に芸術家から迸り出てきたときに、その作家の本物と言える内容が滲み出てきたものと言え、作家固有の作品なのだ」と言うような意味のことを、リルケが言っています。そういう感覚を身に沁みこませていた為に、直ぐに『楠都』と言う作品を上

梓でできなかったのです。

そう言うわけで、主人公の十歳代の後半以降、秀彬が大きく成長していく思春期の青春の日々については、将来、更に詳しく描いた作品を、出したい、と願っていました。そういう風に思っていた為に、主人公の初期の姿しか描いていないと思った、入門篇としての『絆』を、販売する本として、商業出版しなかったのです。

そのような状況を経て、今回生まれたのが、この『楠都』です。『楠都』には、描くべき色々な本質的内容を入れて、詳細に秀彬の青春を描きました。だから「例えば話」でも、挿入するには、作品の筋の本質とマッチしているものでなければ、なりません。共鳴できる内容を捜し出すのは、浜の砂の中から、自分の作品の為に、一つの相応しい色の砂粒を見つけ出す作業のようなものでした。

今回、『楠都』で描いた内容は、『絆』発表から、かなりの期間を経た現時点で、著者が把握した内容です。今後、秀彬に纏わる、更に深い真実を把握した時、発展変化していくべきものでしょう。

九 『絆』を発表してから一万日後の『楠都』に至るまで、年数にして約二十八年が経過していました。そこで、青春の日々以来、今まで「我々は何で生まれてきたのだろう、何のために生きているのだろう、我々は死んだらどうなるのか」という探求の第二弾の把握内容として、この『楠都』を発行することにした訳です。

天が、いつまで、著者に生を与えてくれるか、寿命については分かりません。だが、生の続く限り、今までの探求をさらに進めていくつもりです。天は、更に次の万日、即

ち、二十八年という、生きていく年月を与えてくれるか、分かりません。明日死を迎えるかもしれない。もし、一日、即ち、二十八年という年月を与えてくれるなら、著者は、百歳を優に超した歳に達します。

著者の祖母は、竹中半兵衛の子孫に連なる武士の家系の娘で、頭脳も明晰で、満百十以上の歳まで、元気でいた。祖母と同じ年齢よりも、できれば、さらにその先まで、天が健康な長寿年齢を与えてくれれば、死のゲートを通過する直前まで、芸術を進化させ、高まりまでもっていく精進を重ねていきたい、と願っています。

南アフリカで育った、イギリス公爵家の家系に連なるエリザベス・クララーに、色々教えて呉れた宇宙の司令官は、次のように言っています。

“ほとんどの人は、生まれながらにして高い靈性をもって誕生してくることは稀である。だから、長年の修行による靈性の向上を目指して、人は長寿を目指さなければならぬ。長寿を目指し、その間、営々として修行していけば、長寿の果てに靈性を高めることができる”と。

そのメッセージを目にして、今まで営々と“読者にワクワクして読んで頂く作品を産み出す為”、同時に生きるために闘いながら、余力の全てを尽くして励んできました。今までの長い人生行路は、配偶者や、息子や娘たちとの愉しく香しい生活に裏付けられていました。でも決して、一日たりとも“志”を忘れる事のなかった生活でした。

その結果として今回、『楠都』を出版しました。今迄、万日山の誓いから二万日以上、約六十年の健康な生活を過ごすことができ、その歳月を経て、“生の前の世界は何だったのか” “生とは何なのか” “生の後に訪れる死とは何なのか” について、これまでの調査の内容を報告する為の出版が『楠都』という作品の上梓なのです。

一〇 また、多くの年齢を重ねてなお、美しく麗しい女の方たちがいます。見かけだけでなく内部にも美しい輝きを放っている方がいらっしやいます。作者も、本当に優れた女性たちを通じて、女性の美しさの本質と言えるものを知ることが出来ました。その、真実の姿の一端でも、描こうと努力したのが、この作品の『楠都』です。

男性の著者として、そのような、年齢を重ねてなお、生を十分に愉しく生き切っているご婦人がたに接していると、人生が如何に愉しいものであるか実感できます。そういう方達を目にし、お付き合いできるのは、大きな喜びです。本当に、心も何もかも美しく、高い地点を目指して上昇しようと言う、人たちがいらっしやいます。そういう素敵なご婦人方に巡り合う事は、なんと素晴らしい事かと思えます。何か、我々の人生において珠玉のようなものを与えてくれる『美と、詩と真実』を備えた、そういう人たちがおられるのです。その事実を私は幸運にも知ることが出来、人生の喜びを感じました。ただ知って見ているだけでも、喜びに充たされます。そのような、（美と詩と真実を、生の続く限り求めていければ、どんなにか素晴らしく、生きている喜びを抱くことが出来るだろうか）と思います。年齢には関係ありません。同姓の仲間でも同じです。詩と真実を備え、理解した男性を、友人として見出だすことが出来れば素晴らしい、と心底、思います。

一一 世界中の天災や戦いや、事故の為に、多くの人々が残念にも命を落としてきました。でも、一般の人たちの殆どは、『どうやって亡くなった人々の魂を鎮めるか』知っておられないようだ、と見受けました。ただ、手を合わせて、瞑目するのが普通です。

それが、作品の中で、チベット仏教の『ポアの行』について、主人公が亡くなった親友の為に祈る時に、繰り返し述べた理由です。死者の魂を呼び寄せ、それを、本来行き着くべき先に真心をもって、送ってあげる行法です。それは、何年先に逝ってしまった魂を送ろうとする時でも、応用できるのです。

一二 世の中には多くの苦しみがあります。それは、どういう意味を持っているか、苦しみを鎮めるにはどうすればいいか、チベット仏教の『真髓の行』は、一つのやり方を示してくれています。それについても、しっかりとした説明をするようにしました。

「人にとって苦しみは、今迄の生の結果としての、知ると知らずに拘らず蓄積してきた悪いカルマによるものである、又は、人間として大きく飛躍するために、自ら求める人もいるためでもある」と、だんだん思えるようになりました。そうであるなら「苦しみは、これまでの無数の生を通じて蓄積した悪いカルマをどう消していけるか、を人が悟り、苦しみを克服することによって、悪いカルマを消滅させるチャンス」と考えられないでしょうか。

木内さんと話している時、木内さんが、何回も、次のように言われたことがあります。「色々な高齢の方たちと目的地訪問を終え、親睦の宴会になった時に、殆んどの人が、自分の今迄の人生でこういう苦しいことがあった。これをこうやって克服した。あの時は本当に辛かった」と、打ち明け話をしてくれる。その時には、ほとんどの人たちが、嬉々として、興奮して話して呉れる。逆に、楽しかった話はほとんど出て来ない」と。

この意味は、次のような事情によるものではなからうか。

悪いカルマは、詰まるところ、長い、無数の前世までの生において意識的・無意識的

に、積み重なってきた。そうであるが故に、自分の今回の生において、“身に覚えのない苦しみ”となつて、“救いたい現実の苦しみ”となつて自分に現れてきている。
（どうして自分はこのような苦しみを背負わなければならないのだ。自分が何をしようと
言うのだ）と天を恨みそうになった。でも、どうにか耐えて他人を傷つける行為を避けて
毎日を送ってきた。あるいは、生前、（意図的に苦しみを引き受けて、自分の存在の
レベルを一気に上げたい）と望んだのかもしれない。そういう背景があったと思つてみ
る。

（そうであるならば、自分は、今、背負わされている苦しみを真摯に受け止め、それに
耐えて、その苦しみを恨まず、その苦しみに耐え切れずに悪行をするようなことをせず、
苦しみを克服しながら人生を生きていくのだ。そうすることによって、カルマを解消さ
せる、或いは、人間として進歩することができるのだ）と考える。そうやって、毎日を、
周囲の人々と調和して仲良く、無事に送って行く。それは、苦しい毎日の積み重ねだろ
う。でも、耐えていく。何とか全ての知力を使ってベストを尽くし、苦しみを軽減しな
くす方法を考へて、遂に克服する。

その結果、自分が苦しみに耐えて乗り越えた時、今回の人生で、カルマを解消した実
績をつくつた、苦しみを引き受けて人間として進歩したと、人は無識的に感じ、安堵の
念を感じる。その結果を反映させた想い出を、いいものとして、思い出すことが出来る
のではないか。そういう経緯によって、年をとった今思い出すと、苦しみを克服した思
い出が懐かしい。（背景にあった悪いカルマを解消できた）経験が輝きを持ち、苦しみ
を克服できた、価値ある経験を持つ自分が愛しくなり、話したくなるのではないかと、
“それも嬉々として”と、話しあったものです。

一三 生を明らかにする、生を証する、とは、私共全員が百%迎える死を明らかにする事に繋がります。著者の親愛なる友人に、長大な『オアスベ』三巻を、三年もの間無収入で渾身の力を込めて翻訳した、福永裕史氏がいます。彼の翻訳書の『オアスベ』に、創造主たるヤーウェイが、『オアスベ』が書き下ろされた十九世紀（明治十四年）に生きる、タエ（人間の魂）という人間からの「生と死とは、何ですか？ 教えてください」という問いに対して、次のように答えています。

「私は人間に生と死を与えた。生を与えたのは、いかに生が素晴らしいかを人間に知らしめ、楽しませるためだ。死を与えたのは、死の後にも精進すれば、いかに素晴らしい世界が待っているかを、示したいからだ」と言っています。

又、『オアスベ』は、日本についても非常に重要な事を述べています。なぜ、日本は、「ジャパン」と呼ばれるようになったのか、について、はっきりと述べています。「太平洋に沈んだパン大陸の残骸が、ザ・パンと呼ばれていた。そこに、パン大陸沈没前に向かわされた二つの船団がいて、『イスタ』船団と呼ばれた。『イスタ』とは、先に述べたように、パン大陸の残骸で、別名、ザ・パンとも呼ばれ、それが、太平洋の西北に位置し、今、ジャパンと呼ばれる国だ」とはっきりと言っているのです。

また、さらに追加して、先述のように明治一四年に書き下ろされた『オアスベ』は日本について次のように言っています。

「日本は世界で最も古い国であり、日本は、精霊の降りて来る西暦二〇〇〇年以降において、世界に対して、かつて、地上にこのように精神的に深いことを理解できる人たちがいた事の証人となり、古い宗教を守り、話し言葉を言語にした文字を守って行くよう

にしなさい”と。

日本とは、何の利害関係もなかったアメリカの医師であるジョン・ニューブローが、自動書記でタイプさせられた『オアスペ』で、西暦二〇〇〇年以降の世界において、日本が重要な使命を発揮するとも言っています。日本は、早く、自虐史観を脱却して、売国奴が政治で暗躍しない国にならないといけないのです。真の愛国者の皆さん、お互いにベストを尽くしましょう。

一四 中学一年生の時に、熊本での大水害の時に、近所にあった由子の家を押し潰した山崩れで、秀彬は、素敵だった親友の美しい由子を、失います、それ以来、主人公の秀彬に強く迫ってきた課題が、“人間の生とは何か、死とは何か”というものでした。若くして親友の死に出会い、人間の“生と死”と言う大きな命題に直面した秀彬でした。秀彬はそれに、正面から徹底的に向き合っています。

一五 世の中には、自分も含めて、愛する人たちを失って、いつまでも悲しみの中にいて、忘れられずにいる多くの人たちがいます。我々全員が直面する“死”とは何かを考えるために、生と死に真正面から取り組込み、回答を求め続けてきました。現時点まで把握した内容報告が、先に述べたように『楠都』です。

一六 また、若く将来性だけを持っている若者たちに本当に好きな人ができたら、“相手に絶対に意志表示をすべきだ”ということ、第五巻に、“我が観音菩薩像”というテーマで書いておきました。

“我が観音菩薩像”は、主人公の秀彬の母、美紗子が、伯父から聞いて銘記していた、エピソードに纏わる象徴です。若い時に思慕を寄せていた、今は亡き女性を仰いで、伯父さんが、心に宿ったお嬢さんの姿を象徴したものでした。伯父さんは、今から、お嬢さんを観音菩薩のように心の中に大事にして抱き、生きていこうと、決心していました。

美紗子の伯父が若い時に思慕を寄せていた、師の家のお嬢さん、お会いしてから後にお嫁に行った彼女から、死後に受け取ったのは、親展の書面でした。お嬢さんの死の後に、胸を締め付けられる、心からの願いが綴られた、人伝に渡された手紙です。親展の手紙には、この世を去る前に、この世に心から後悔を残したくない、と願うお嬢さんの真情が吐露されていました。

一七 本当に大好きな人が現れ、真に好きだと思って意志表示をした後の結果は、好きな人にアプローチした人の資質に関係してきます。あらかじめ、己の資質をどれだけ磨いてきたか、それが結果を左右する要素です。

ただ、待っていては、いけません。相手は“知らない”のですから。又は、相手は、あなたに何も言わずとも“あなたを心から慕って、あなたの言葉を待っているかもしれない”のですから。ご参考にしていただければ、と願っています。

一八 この美しい地球上で、今も、一般の人たちが全く望まない戦争や殺戮が起こっています。その根源の原因について、広範に調べ上げた現在までの調査内容報告が、『楠都』という作品内容の一つでもあります。以前には知らなかった“失われた十二支族”の真の根源は、かつての宇宙における“エゴに充ち他人を支配しようとする重罪人たち”

で、地球に更生を願って送られた連中である”という宇宙船のパイロット達からの情報に触れ、認識を新たにしました。

それらとその子孫たちが、更生を願って送られた地球に棲み始めてからも、“人間同士が協調していかないと生きていけない”ということを、どうしても悟らず更生しないでいる。今の混乱した状況を作り出している根源の一つである”という証拠を突き付けられもしました。

世に行われている、辻褄を合わせて、ユダヤ民族の、“かくかく、しかじか”の族が、失われた十二支族に纏わる、という書籍内容は、真実ではないようです。全く違った視点からの考察が必要な内容でした。

一九 我々は、今このような時代において、どう生きるべきか、著者は木内さんと無数の質疑を交わしてきました。結論は、次のようなものでした。“各個人が、自己を確立し、他との調和ある生き方をどう送るかについても、正確に理解するだけでなく実行し、個々人のやれる範囲内で、誠実に生き続け、できるだけ仲間を増やし続ける。人は、今の地球上で最新参者の生き物で、チンパンジーやオランウータンではできない使命を帯びている。地球環境の整備、他の生物がより良い環境の中で生きていかなければ人間が大事な役目を担うべきで、各個人が、自分のやれる範囲内で努力しなければいけない。金の為に生きることをやめよう”と言うことでした。“どうすれば”は、各人の課題です。各個人が、誠実に極めていかなければいけないテーマです。

二〇 長い作品になったこの『楠都』を、コツコツ読んでいただければ、この作品の中

に明確に書こうとしたことを、ご理解して頂けると思います。

① 人は何のために生まれたのか？

② 人間の生と死とは何か？

③ 死の先に何かあるのか？

④ 人が生きている時の大きな目的とは何なのか？

⑤ なぜ人は長寿を目指さなければいけないのか？

⑥ 芸術家を目指して生きる時、無名や失意よりもなお始末に悪い名声を求めず、全ての名声より一層偉大な失意の時代を、君は己を磨きながら研鑽を続けて送られるか？

⑦ 物理的な世界において、万有引力の法則とは何の現われなのか？

⑧ 人間の触感・触覚とは一体何なのか？

⑨ 光の速さを超えるものはいったい存在するのか？ 存在しないなら、何故宇宙から来た宇宙船は光速を超えて、移動するのか？

⑩ UFO 遭遇証言者が無数に存在するのは何故か？

⑪ UFO に乗った人々はどこの惑星から来ているのか？

⑫ 現在の地球上の人類とは何か、役目は？

⑬ 日本人とは何なのか？

⑭ 日本の成り立ちはどうだったのか？

⑮ 道元禅師の『修証義』、人の辿るべき生き方とは？

⑯ “感性論哲学”は如何なる哲学か？ 何故、理性の哲学を超えなければならない

⑰

か？

㊤

人を愛すると言う事は、どういうことなのか？

㊦

宇宙に満ちている、未知の力とは、何なのか？

㊧

D・H・ロレンスの『チャタレー夫人の恋人』と言う作品は何を言いたかったのか？

㊨

触感が魂・意識と同じならば、性とは魂の交感なのか？

㊩

女性も男性も、生きている限り人生を愉しむことが出来るか？

等々、多くの疑問を解きたいと願う読者は、著者の今までの調査内容報告であるこの『楠都』という作品から、何か大事なものを掴んで頂ければ、幸いです。

二 高校二年生の時、秀彬は、熊本に引っ越してきたアメリカ人の女流作家志望のジェーンと知り合います。彼女は、大きな興味を日本に持っていて、日本に引っ越してきました。最初は古代日本の調査の為に青森に住み、数年後、熊本に移住してきた女性でした。ジェーンは、秀彬一家に、色々な新しい知識を齎してくれる、かけがえのない人材になります。秀彬に好感を持ったジェーンは、秀彬の「将来、作家として大成したい」と言う志を知って、自分の持っている知識を徹底して、秀彬に伝えます。作品は、秀彬が知った次の内容について詳しく語っています。

○ジェーンが紹介してくれた、一八八二年に自動書記された『オアスベ』

○ジェーンの伯父さんが教えてくれたアダムスキーの『宇宙哲学』

○同じようにジェーンが伯父さんから聞いて紹介してくれた、祖母が英国の公爵家の家系にあたる南アフリカのエリザベス・クララーの『金星由来の人たちとの交流』

○物理学者である友人からのジューンが聞いた、量子もつれ（エンタングルメント）等についての情報と、"宇宙に満ち満ちている何でも知っている知性"の本質、等について述べながら、物語は進行していきます。若者が、内容を抑えておくべきものとして、作品の終わりの方で、詳述しました。

二二 第二巻以降も、この作品の重要な部分が続きます。是非、第一巻で止まらずに、第二巻、第三巻、第四巻、第五巻、第六巻へと、根気よく進まれることを著者として願っております。後半に進むと、秀彬の恋の物語がメインです。

初めから読まず、途中の巻を手にする読者もおられるでしょう。全巻の内容は、第一巻の「目次の後、本文の前」に、『まえがき』、『あらすじ』を、挿入して、参考の資とさせて頂きました。この第一巻の『まえがき』、『あらすじ』は、この『楠都』を読まれる時の、大きな指針です。ご参照ください。

二三 物語の中ほどでは、地球上の人間が、遵守すべき宇宙の調和の法則を、具体的にどのように捉え、毎日の実践の中で、人間は、どういう態度をとっていけばよいかを、探っています。

第一に、アメリカ政府に対し宣誓して行われた多くの人々の証言により裏付けられた、UFO搭乗者、アダムスキーからの情報があります。宣誓した証言が事実と違ってれば、証言者は、重罪を犯した人間として、刑務所に入らなければなりません。他の複数の目撃者の証言に裏付けられ、疑う余地のないアダムスキー関連の情報が色々とあります。他の惑星からの人類と接触したアダムスキーによって齎された、太陽系の他の惑星

からの、地球上の人類へのアドバイスの内容は、絶対に無視できないものを含んでいます。

二四 アダムスキーは、カレッジで哲学、“人間として他と調和しながら生きる哲学”を教える人でした。それ故に、コンタクトとして、他の惑星からの人々によって選ばれたのでしよう。UFOに搭乗していた他の惑星のパイロットたちから、先に述べたように、アダムスキーが初めて聞いた重大な内容があります。宇宙の重罪人たちの子孫の係累が、いかに、現在も地球上で戦争を引き起こしているか、現在の問題の根本原因の一つとして語られています。また、地球人が知らなければいけない、宇宙の調和の法則とは何か等、重要な、地球人が理解し実行しなければいけないものを、非常に理解しやすい言葉で、説明しています。

二五 第二に、先に述べた、イギリスの公爵家の家系のエリザベス・クララーが、地球が属する太陽系に、一番近い太陽系であるプロキシマ・ケンタウルス星系の惑星の一つ、メトン星に行って教えられ、“どうしても地球人に理解し実行してほしいこと”と言っています。それらについて、作者は、そのエッセンスを読者に伝えようと、努力しました。それらの内容は、『楠都』の主題でもあります。

二六 ところが、“感性論哲学”を首唱されている芳村思風先生の哲学を知った時、先生の主張されている哲学が、宇宙の偉大なる指導者や、エリザベス・クララーの伝え

ようとしている内容と、殆ど軌を一にしていることを知り、感銘を受けました。そこには、（地球人がこれから何千年にもわたって理解し実行していったほしい。自分も実行していきたい）と、秀彬も思う哲学の内容が、解りやすく、詳しく、述べられていたからです。

二七 芳村思風先生の『感性論哲学』について、色々と、船頭役をしていただいた、板室温泉の四百年以上続いている大黒屋の現会長、室井俊二氏には、感謝の言葉を述べなければなりません。

室井氏は早稲田大学で哲学を学び、四百四十年以上続いている『大黒屋』という旅館を、『思想を元にして経営する』という強い信念を持って来られた方です。彼の経営哲学を基盤にして、経営されている大黒屋のお客さんのリピート率は七十%以上に保たれています。彼の支援のお陰で、もの派の芸術家、菅木志雄さん等の芸術家が、世界的に有名になった面でも貢献している方です。室井氏の導きを通して、人間としての基本的な態度を『感性論哲学』として解りやすく展開されてきた芳村思風師の、『感性論の哲学』の全貌を知ることが出来ました。

『感性論哲学』の内容は、秀彬が、今後、千年以上にわたって、今後の人類が、理解し実践しなければならぬものとして捉える内容を持っていました。（ソクラテス以来、ヘーゲルに至るまでの理性による哲学では、もう、人類はやっていけない）と、秀彬も共鳴します。『説得の論理ではなく』、『納得の論理』じゃないと、真の人類同士の協調は得られない、という哲学であり、生き方です。

読者に解り易いよう、芳村思風先生とよく打ち合わせをした上で、『感性論哲学』で使

われている言葉を自分の解釈として書かず、展開させました。内容や言葉をあまり変えず、出来るだけ、解りやすい言葉で、作品の中で秀彬が理解したことを、有機的に述べられるように努力しました。主人公の秀彬は、芳村思風先生の哲学に大いに共鳴し、これからの人生に活用し、力を尽くして生きていく覚悟を固めます。

二八 “毎日見上げる空の上に何が広がっているのだろうか”という問いに対する答えを、主人公の秀彬は、小さい頃より見つけ出したいと思っていました。目に見える科学の観点からすると、当然、空気がなくなっていて、真空中に近い空間が地球の周りに広がっています。

だが、地球の周囲の真の構成について、『オアスベ』は、地球以外の他の惑星、火星、木星、土星と同じように、周りは“物質的な世界、霊的な世界、神界によって覆われている”という表現で、三層の構造について、はっきりと解説しています。

そこで、述べられている事柄をへ“実感として感じられない、信じられない”“証拠がない”“オカルティック”としか“思えないなら、いったん、”“そういう事が言われている”と、頭の片隅に記憶して、自分に必要な検討事項として保留しておく態度が必要ではないかと思えます。それが真実であると、真の意味でわかる日が、読者にも訪れる時が来ることを願っています。いずれ、万人に訪れる死の門を通過した時に、解るでしょう。

二九 人間にとって、恋愛は多くの人たちにとって、避けて通れない課題です。主人公の秀彬は、小学校六年の時に、重要な出会いを持ちます。

きっかけになったことがあります。神社で大きな青大将と親しくなり、キツと持ち上げた青大将の頭を撫でてあげるようになった秀彬です。青大将とも交感出来る少年でした。その現場を偶々見ていた水野老師は、秀彬の素質を見抜き、秀彬の両親の許可を得て、徹底的に鍛え始めます。それが、重要な機縁を秀彬に齎したのです。

その老師の家で、秀彬は、人生において決定的な出会いを持ちます。そこで出会った婦人は、秀彬の美しい母親、美紗子が付き合っている、薰り高い女性の友人たちを見慣れ、目の肥えている筈の、秀彬にとっても、心を揺さぶってやまない、極めつきの美しい婦人でした。美紗子や今迄に出会った婦人たちを遥かに超える、美を具現化している女性です。

三〇 その麗しい婦人は、老師の奥さん、英子さんの医師仲間で親しい友達である年配の奈美さんです。初め、秀彬が、まだ六十歳台の未亡人と思っていた健康で美しい奈美さんは、実際には、八十歳を超した高齢の婦人でした。秀彬の胸を締め付けてやまない、稀有で素晴らしく素敵な婦人で、十年前に病院の理事長だった夫を亡くした寡婦です。

秀彬は、年齢に関係なく、美しい奈美さんに心を奪われ、奈美さんを見るたびに、胸を締め付けられる、恋心を持ち始めます。奈美さんは、誰にでも、その美しさから、畏敬の念を持たせる婦人ですが、みんなは、出来るだけ自然に振舞おうとします。けれども、つい、相手の人々の心を高まらせるものを放っている婦人でした。

東大にも合格できる実力を持っていたにも関わらず、秀彬は、学歴と言う看板を求めることはせず、地元の大学の建築科に進学し熊本に留まります。大人になって、老師の助言が偶然のきっかけとなって、奈美さんと運よく、懐石料理の店のランチで二人きり

になれた秀彬は、”思いのたけ”を奈美さんにぶつけます。全力を挙げた秀彬の一種の率直さに満ちた告白は、判断力の鋭い奈美さんに、しっかりと受け入れられ、その夕刻、憧れの奈美さんと恋人同士になれたのでした。

三一 それから、一年以上経って、秀彬は、親友から教えられて医学部の高嶺の花の亜樹さんを知ります。学部が違うとはいえ、同学年なので出会っておかしくなかったのに、それまで、秀彬は亜樹さんを知りませんでした。亜樹さんは、かつての親友だった由子に印象の似た、薫るような女性でした。誰も、攻略できなかった、高山の奥深くに咲く、高嶺の花のような女性です。

しかも、不思議な巡り合わせで、亜樹さんは、秀彬が高校の時に、熊本城の西の、洗馬橋近くで見かけた人でした。中学校の時に死別した由子に、よく似ているので、ビツクリして見とれた時のあった、第一高校の制服を着た女生徒、その人でした。

それ以来、また会いたいと思って、二度と巡り合う事のなかったその女性が、亜樹さんだったと知った秀彬は、この幸運な巡り合わせに感謝します。秀彬は、高校以来、数年間、もう会えなくて、心残りのまま、月日が過ぎていたのをもう忘れてしまっていました。もう、どこか遠くの大学にでも行ったのだろうと、想像した時もありました。

それ以来引きずっていた、片思い的な遭遇事件の、暫く後、今やっと再会した亜樹さんでした。その姿に、全身を揺さぶられ、惹きつけられます。奈美さんとの関係に、内心、心苦しく思い、悩みを抱きながらも、どうしようもなく、若い亜樹さんに、長い人生の同伴者として、心を惹かれていく秀彬でした。

秀彬は母親の美紗子に相談します。奈美さんとのことを知らない美紗子は、（あの素

晴らしかった由子さんに似ている美しい娘さんがいるなんて、信じられない」とビックリしながらも、真剣に亜樹さんが秀彬の相手となることを、願い始めたようでした。

母親から伯父さんにまつわる『我が観音菩薩像』のエピソードを知らされて、どう行動すべきか理解した。秀彬は、亜樹さんに自分の、素の、有りのままの姿を出して、知力を振り絞って接近し、結局、初めのデートに成功し、写真も撮り合います。

三二 澆渌として美しい亜樹さんとの繋がりを持てた秀彬は、大好きな奈美さんに秘密にしておかず、きちんと奈美さんに報告します。奈美さんは、女優に勝るとも劣らない雰囲気を感じた亜樹さんの写真を見て、この娘さんは素晴らしい。多分、あなたの、今からの人生で二度とこのような素敵な女性が現れる事は非常に稀よ。このチャンス逃がしちゃいけない。もう高齢の自分との事はこの位にして、若い者同士で付き合うことを優先しなさい」とコメントします。でも、結局、高齢だけ之余りにも素敵な奈美さんと深く契りあった秀彬は、奈美さんを離れることはできません。お互いにもっと若い時に出会っていたら、秀彬は、一生、奈美さんと添い遂げられたでしょう。

でも、今、自分のエゴで奈美さんを離れるのは人間のやることじゃない」と判断し、出来る限りの誠を、秀彬は奈美さんに尽くしていこうと覚悟します。誰の寿命も解らないものの、奈美さん亡きあとは、亜樹さんに全力を挙げて尽くすのだと決心して、生きて行かざるを得ない秀彬でした。

結局、若々しく極め付きの美しい花と、人生に練達した華のある、飛びぬけて美しい女性とを両手にして、熊本の光と影の青春の真ったただ中を、秀彬は、生きていくことになります。濃密な世界を味わいながら。

恋人同士になるには、青年が、どうあるべきかを、筋書きの中に描写しました。読者の方たちに、素晴らしい相手と一緒にになるには、どういう心構えを持つべきかを再確認して頂くため、出来るだけ詳しく描写しました。参考になればと思います。

三三 作品の中で描いた、南アフリカで生活していた金髪碧眼・アーモンドのような目を持つていたエリザベス・クララーは、イギリス貴族の公爵の家系です。幼い時から知らないうちに、前もって、何十年間も、宇宙空間でも生きていけるように、霊性の向上を目指して、未知の人たちによって訓練されていました。リズは、無意識的に、宇宙の深部から自分を迎えに来る人々がいると、感じるようになります。

時は到ったと見たか、地球から最も近い太陽系、プロキシマ・ケンタウルス星系の惑星から来た宇宙船で、同意の上で、プロキシマ・ケンタウルス星系の本拠地の惑星「メトン」に司令官と一緒にいきます。英語を流暢に話せる人々です。元々、住めなくなる金星を逃れ、地球に一時的に居て、ピラミッドも残っていた金星由来人類の子孫、宇宙船の司令官と、恋人になることを受け入れた上でした。その後、色々な事を教えられ、「重力と時間と光は、コントロールできる。星間旅行も簡単にできるようになる」と言っています。非常に意味深な科学的な内容です。

三四 だが「地球上の人類が、真にお互いの争いをやめ戦争をなくし宇宙の調和の法則を理解し実践するようにしなければ、重力と時間と光をコントロールする技術や、星間旅行を出来る科学が人類に開示されることはないだろう」と言っています。

三五 読者のあなたも、良く考えてみて下さい。アダムスキーを案内してくれた宇宙船の男女のパイロットたちから知らされた事実を。

“他の惑星の一般の人々は、約三か月に一度、大きな宇宙船の母船に乗って、宇宙を旅し見聞を広めている”と、宇宙船のパイロット達は、口を揃えて言っています。金星系の人々、木星系、土星系など、多くの我が太陽系の惑星の人類がそうしている。”そういう歓びを経験できないのは、地球人だけだ”と、言っています。

何故か？ 地球人は、お互いに戦争ばかりして徹底的に傷つけあつてきた。その結果、完璧なまでに、何百万年も、繁栄と滅亡のサイクルを繰り返してきた。そういうことを繰り返していたら、進歩させられる筈の科学も人類も、絶滅してゼロに戻り、進歩させられないのです。

それに対して、何百万年も戦争などせずに来た他の惑星の人類は、元の木阿弥のゼロの地点に、科学が戻ってしまわないように、地球人が侵す愚かさを、回避してきた。それで、比類なきまでに科学を進化させてきた。地球人は戦争ばかりして、人類同士で殺戮し合い、地球を破壊することばかりに、専念している。だから、UFOのような、惑星間旅行を一瞬で出来る科学技術は、夢のまた夢になっている。何十万年か前から、今までと違った道を辿って、地球を住めなくなるまでに破壊する愚を避けていたら、地球に住む人類も、同じようにできたのに、です。

三六 今の化石燃料を使って行われている宇宙旅行の概念は、愚かにも、地球上で言うところ、飛行機で行けば、十時間で行ける大陸間の飛行を、手漕ぎの船で、大洋を漕いで渡ろうとしているようなものです。いつまで経っても化石燃料を燃やして、地球や宇宙を

汚染しながら、ヨチヨチと飛行したり、海を渡ったりしている。

大体が、宇宙飛行の、『飛行』と言う言葉自体が、全く、地球人が宇宙のことを理解していないことを表していると、他の惑星の人たちは言います。他の惑星の人々は、宇宙のエネルギ―に、乗って“瞬間移動する”と言うのです。飛んでいくとは言わない、と言います。

三七 戦争を引き起こして地上を戦場化し、一般人を徴兵、兵士・一般人の別なく、無数の死傷者を出す戦争の大元になっている勢力がいる。他人を支配下に置きたがって、戦争を引き起こす、利己的な多くの人々、戦争で無数の人々の血を流しあうように持っていき、自分たちだけが利益を得ることを喜びとする、他人の血を見ることが好きな地球人の中に住み着いた、ある勢力、それに賛同する人々、それ等全ての人々の無理解さを、愚かと言わずに、何と言ったら良いのでしょうか？

兎に角、地球人は、戦争ばかりして殺し合ってばかりいる。だから、科学がよい線まで発達する兆しがみえ、更に飛躍しようとしても、また、全てを破壊し地球を住めない惑星にする。そうやって、元の木阿弥に戻り、ゼロから再出発しなければならぬために、惑星間移動を短時間で可能にする科学も実現できないのです。

このような、地球上の一般の善良な人類を苦しめる勢力から、もう離れた生活を早く見つけて、始めようではありませんか。金に束縛される人生から離れた生活を確立できるように、みんなが、努め始めましょう。一緒に考え、考えるだけではなく、早く実行に移していこうではありませんか。元々、どの宇宙においても、創造主によって創造された人間、人類とは、周りと強調し、仲良く暮らすことを喜びとしてきた人類でした。

そういう本来の姿に戻ろうではありませんか。

我が太陽系でも、他の惑星の人類は、どんな仕事でも、歓びを持ってしながら過ごしている、とアダムスキーやエリザベス・クララーは、宇宙船に乗る人々から知らされました。『食べるために働く』『金の為に働く』と言うのとは違います。人間としての生を使って、生きている限り、他のために奉仕して仕事をし、喜んで生きていく。その間に、生まれてきた歓びを味わいつつ、宇宙をもっと知る為に、定期的に宇宙の果てまで旅をしている。『宇宙に存在する全てがどうやって存在しているか』を知る為の『探索の旅』に出ているんです。しかも、先述のように、約三か月に一度、です。地球人だけのようです。このような喜びを味わえないで、地上に這いつくばって、ナメクジのように生きている人類は。早く地球上にも、先に述べたように、宇宙の神秘を、『深宇宙まで旅しながら』全員が知ることのできる、平和な日がくることを、望んでいます。

三八 かつて、大正時代に、大内青嵐氏によって道元禅師の言葉のみで編纂された『修証義』について、著者は、若い時に、長崎の皓臺寺こうだいじの金子帰山老師に徹底的に解説して頂きました。修証義の全貌についての解説は、膨大な時間を要します。『修証義』によれば、人は死ぬまで修行をするもの、『修と証は、一義なり、一等なり、等しい』です。修行し続ける姿が、生を証する、悟りと通じるのだ、と教えて戴きました。

アメリカで、仕事をしながら、作品の為に取材を重ねていた二十年間のある時点で、まだ、ご健在だった、金子帰山老師にお願いしたことがありました。『修証義について教えて戴いたこと、五十ユニットに及ぶ録音内容』を使わせて頂きたいとお願いした時がありました。『何に使うのか』と尋ねられましたので、小説の『楠都』と言う作品に

使います、とお答えし、許して頂きました。その、ご恩を受けた、金子老師も、もう、死のゲートを通過し、逝ってしまわれました。

内容を読者にぜひ知って頂きたいと思うゆえに、主人公が身に付けた内容の、エッセンスを作品に含めました。

三九 秀彬の父、堯之の友人で、日本の成り立ち、特に古代の日本について研究している「古代史研究会」の人たちが、話をしてくれる機会に秀彬も出席できます。話の中には、重要な日本の、過去、約三千年の歴史の真実が、含まれています。これまで、東大と京大の間で、「邪馬台国はどこにあったか」について、論争がありました。結論は、古代史研究会の人たちの間では、出ているようです。

四〇 二〇二二年十月は、著者にとっても、非常に喜ばしい時でした。長い間、（多分ノーベル賞を受賞するに違いない）と思っていた三人が、やっと、賞を貰って、授賞式に参列して喜びを表しているのを、テレビで見たからです。陰ながら（よかった）と思っています。

この作品の中では、熊本市で、秀彬が友人になったアメリカ人作家のジェーンさんが、スタンフォード大学時代の物理専攻の親友から聞いた、量子エンタングルメント（量子もつれ）についての背景を教えてください。デビッド・ボームという不遇の人生を送った先駆者と、その業績を発展させた四人の業績について聞いていた内容を、秀彬に語っています。

四人は、宇宙の隅々まで、今は地球上の人類が知らない力が働いている、ということ

が本当かどうか、事実を実験的に立証しようと、努力していた人たちでした。

結果として、アインシュタインが認めなかった「量子エンタングルメント、量子もつれ」が存在するという内容を、完璧なほど、ベル博士は、『ベルの不等式』として示し、又、他に続いた人々は、実験的に遂に立証して見せたのです。

最近、二〇二四年十二月二十八日の夜十時から、NHK総合テレビで、『量子のもつれ』という番組を見ました。非常に分かりやすく解説された企画でした。

「量子もつれ、量子エンタングルメント」の課題が世に出て以来、宇宙の片方の果てにある量子と、宇宙の別の果てにあるその対の量子が、関わりを持ち合う、同時に同じような情報を共有しあう、という事実は、非常に重要な事柄を暗示しています。この作品の主題と密接な関係があるのです。

簡潔に言うると「宇宙の隅々まで、人類が今まで知らなかった、未知の力が働いている」と言うのです。端的に言うると、オアスベでは、『創造主の力』、グレッグ・ブレーデンは『聖なるマトリックス』、仏教の華嚴経では、宇宙の創造以来、宇宙のあらゆるものを結ぶ、大いなるエネルギーによって成り立っている『不思議な網』と呼び、網の目構造の一つの単位自体が目である宝石となったようなものであり、それは、「宇宙の目としての一体の役割を持つ」といっています。マックス・プランクは、それを『万物のマトリックス』、即ち「意識を持った賢明な知性」と呼びました。木内さんが言われている『膨大な意識』と同じものではないかと、著者は思っています。

アメリカ陸軍が、ある人のDNAのサンプルを二つに分離して、五百六十km以上離れた所に別々に置いた実験をしました。遠く離れた二つのDNAサンプルが、全く同じ反応を示した結果が得られました。時間経過は、百万年に一秒しか誤差を示さない原子時

計で測っても、経過時間としての値はゼロだったというのです。そこで、“宇宙の果て同士でも、全てが繋がっており、背後には、不思議な力が働いている”とっています。ジュネーブの大学のニコラ・ジサン教授たちの、一緒に作成した二つのフォトンをお互いに二十二km離して得た、双子のフォトンの挙動の実験結果は、“何回やっても、全く同じ通路を選んだが、その背後には、『不思議な力』が働いていると考えざるを得ない”とっています。

それに加えて、先駆者のデビッド・ボームが示した、波動方程式があります。ニュートンの運動方程式に、未知の力が存在しているという項目を、運動方程式に追加したのが、デビッド・ボームの波動方程式でした。

デビッド・ボームの波動方程式の表わす内容を検証しようと努力し、アラン・アスペ教授、ジョン・クラウザー博士、アントン・ツァイリンガー教授たちが、夫々示した実験結果は、量子エンタングルメントの背後に、“不思議な力が存在している”と言う事を立証しました。その功績により、デビッド・ボームの後に、デビッド・ボームの主張したことを立証しようとした三人は、ノーベル物理学賞を授与されたのです。

ノーベル賞は、まず端緒を切った、デビッド・ボームにも授けられるべきでしたが、ボームは、既に、失意のうちに亡くなっていました。オッペンハイマーにより才能を見出され、プリンストン大学の助教授に招聘されていたデビッド・ボームでしたが、インシュタインや多数のインシュタインに追隨する科学者たちにより、“子供のいたずらのような考えがもたらした理論だ”として批判され、プリンストンからも追われ、不遇な人生を送ったのでした。ベルの不等式を考え出したベル博士も、脳梗塞で亡くなっていました。

先にあげた、ノーベル賞を授与された三人は、結論として、量子エンタングルメントの背後には、不思議な力が存在する事実を示したのです。『ベルの不等式』が成り立たない場合があり、その力は、ニュートンの方程式に付け加えられた部分の数式、即ち、『未知の力』が存在することを示したのです。

それを、アインシュタインは、『オカルト』と呼び、『量子エンタングルメントなど存在しない現象だ』と非難し続けたのです。だが、時代は移り変わり、偉大なアインシュタインも理解できなかったことが、『真実であると科学的に立証された』のでした。ジェーンによると、エリザベス・クララーは、宇宙船で会った司令官によれば、『アインシュタインは、インスピレーションを天から与えられたが、地球上の人類がコントロールできない核開発は、人類に与えられた素晴らしい科学を誤用するものだった』といっています。

アインシュタインは、 $E=mc^2$ という方程式を応用した原爆開発をアメリカに働きかけた張本人の一人です。アインシュタインは、ボームに対しても、結果的に酷い仕打ちをしたことになりました。核兵器の開発に対し、ナチの計画を止めさせるように働くべきでしたが、負けないうちにアメリカに開発を急ぐようにしたのは、原爆で多数の無辜の命を落とされた日本人として、残念でした。

日本では、既に原爆開発が、ある場所で完成しており、天皇陛下が、そういう非人道的な兵器を使つてはならぬ、と軍に指示したために、日本は、原爆を戦争に使わなかった。と、ジェーンは、自分の調査結果を、秀彬に教えて呉れます。ボームに対して、アインシュタインは、『オカルト』などと言って葬らずに、もっと支援すべきなのに、酷いことをし続けた結果になってしまいました。

作品の中でも述べてありますが、マックス・プランクは、〃人間が何者であろうと、宇宙での人間の役割が何であろうと、人間も野菜も宇宙の塵も、高次のパワーの影響を受けている〃と述べています。〃空っぽに見える空間に、高次のパワー、エネルギー・フィールドが存在している、と考えざるを得ない〃と公言しています。〃我々が住む物理的な世界を形成しているのは「高次の知性」である事実を示唆している〃とも公の場で宣言しています。へ科学者のマックス・プランクが、「神」と表現しなかったのは、至極、誤解を受けやすい、と思ったからに違いない〃と秀彬が思った事情を、作品の中で示しています。

マックス・プランクは、半世紀も前に〃全てのものは極めて現実的な、従来の説明が成り立たないエネルギーを通して繋がっている〃と説いているのです。著者としても、へこの宇宙に満ち満ちているエネルギーを、地球人類の役に立つように使わない手はない〃と思います。

作家のグレッグ・ブレーデンは、マックス・プランクが「万物のマトリックス」と呼んだものを「聖なるマトリックス」と呼んでいます。そこには、次のような、三つの原理が働いていることを示唆しています。

「一つ目の原理は、全ては「聖なるマトリックス」に存在しているので、全ては繋がっている。もしそうなら、一人の人の人生の、ある局面での行動は、別の局面にも影響を与えている」と。

それが因果応報の原理か、と秀彬が考える場面があります。

「二つ目に「聖なるマトリックス」は、どんな微小な切り方をして、全体と同じ構造を含む。現代科学では、ホログラフィックであると呼ぶ。全宇宙の意識の世界自体はホ

ログラフィックなものと考えられる。何処かで誰かのために祈りを捧げたとする。祈りは既に相手の許に届いている。祈りは既にあらゆる場所に存在するので、誰かが送る必要がない。励起させればいい」と。何という明確な説明の仕方でしょうか。

「三つ目の原理は、現在、過去、未来は、緊密に絡み合っている状況を示唆しているということだ。「聖なるマトリックス」は時間を支配し、私たちの現在の選択と、将来の経験との間に、連続性を持たせている。

とにかく、私たちを、他の人たちやこの世界や、最も高次のパワーに結びつける大きな網「聖なるマトリックス」が、この宇宙に存在する事実は、明らかなのだ」と。

「最も高次のパワー、絶対的な存在が存在している」とグレッグ・ブレーデンは断言しているわけです。グレッグ・ブレーデンも、慎重に言葉を選んで、神とは言わず、変に取られるのを避けたくて「聖なるマトリックス」と表現したかったのでしょうか。

「この三つの原理を正しく理解すると、人生で経験する出来事は、それ以前とは違った意味を持つようになり、人生に積極的に関わって行くようになる。本当の意味で、私たちは力強さを備えるようになってくる」と、作品の中で、秀彬の父親の堯之は言っています。

マックス・プランクは一九四四年にフロレンスで講演を行っていますが、そこで、次のような意味のことを吐露しています。

「生涯を最も明晰な科学である、物質を構成する原子の研究に捧げて来て、結論を得た。原子等、存在しない。原子とは、ある実際に存在する力の現れに、仮に名称を与えた、架空の実体のない名称だ。『ある力』が存在する故、全ての物質は生まれ存在する。『ある力』は、原子という、我々が仮に粒子として名付けたものを振動させ、原子のミ

クロの太陽系を保っている。『ある力』の背後に『意識を持ち全てを知る賢明な知性』がいる。『意識を持ち全てを知る賢明な知性』こそ「万物のマトリックス」だ」と。原子の研究に生涯を注いだマックス・プランクが死のゲートを通して前に到達した結論は非常に重要だとは、思いませんか？

四一 この作品では、一人の少年が、人生や、空の果てまで広がる宇宙への疑問に目覚めて、一人の人間として成長していくうちに、先述したように、男性として、周りの素晴らしい女性たちと、深く愛を交わしていく姿も描きました。

物語が始まって、その後の約十五年にわたる生き方を描くために、青春時代に起こる恋愛やそれに纏わる性の詳細から決して目を逸らさないで、描かずにはいられませんでした。綺麗ごととして、描くには、人生の現実には、余りにも生々しく、歓喜を齎すものがある、と感じているからです。綺麗なプラトニック・ラブは、余りにも現実離れた、真実の愛の姿を全身全霊で体験できない時の、愛の姿ではないかと、主人公の秀彬は、感じながら、激しい青春を生きて行きます。

四二 その延長として著作権の切れた原書『チャタレー夫人の恋人』を速読して速記でまとめたものを、読者の参考の為に、挿入しました。D・H・ロレンスの力作である『チャタレー夫人の恋人』は、単なる主人公のコンニの性だけについて赤裸々な描写をしたものではありません。自分に合った恋人を探し当てるまでの、コンニの誠実な恋愛小説です。それについてのいきさつを知って頂くために、物語の中に入れました。D・H・ロレンスは、人間にとって何が大切かを訴えようとして、『チャタレー夫人の恋人』

を書いていきます。以上のような事情が、青春の真ただ中にある青年を描きながら真正面から向き合い、『楠都』という作品が長くなった理由です。この背景をもとに、読者の皆さんが、根気よく第一巻から続いて、最終巻まで読み進めて戴ければ、ここで描いた青年の生き方について、よくお分かりいただけると思います。

四三 小学校高学年の少年だった主人公の秀彬は、色々な経験を大学時代迄に経験し、アメリカのアリゾナ州スコッツデールにあるタリエセン・ウエスト建築学校に留学します。フランク・ロイド・ライトの「自然と建築との融合」を勉強し卒業、職を得て社会に育っていく青年になるまでの「生と死」、いかに誠実に純粹に生きるか求める姿”、”恋愛のありかた”などについて模索しながら真剣に生きていく姿を、温かく見守って読んでいただければと、願っています。

四四 第一巻、第二巻、第三巻、第四巻、第五巻、第六巻は、夫々に、違った傾向の内容を描いています。年齢が進むにつれて、一人の若者が成長していく時、当然、直面する内容、味わう内容が違ってきます。第一巻の内容で、この『楠都』という作品の全体について即断せず、第六巻の最後まで進まれるように、著者として望んでいます。

四五 これからも、”死のゲート”を通過するまで、著者の探索は続きます。この緑溢れる美しい街、熊本を舞台にした『楠都』という作品自体も、近い将来、内容の追加・深化を狙って、改訂版を出し続けていく予定です。

熊本に帰って、建築家というプロの道を歩きながら、亜樹さんや奈美さんとの間で、

“光と影の青春”の日々を送って行く秀彬です。この、『楠都』の続編、将来上梓する『楠都』の第二作では、奈美さんとの歡喜に充ちた日々と、やがて訪れた奈美さんとの永遠の別離、それに続く、秀彬と亜樹さんの濃密な毎日の愛の日々が描かれます。奈美さん亡きあと、亜樹さんと共に、人生の経験を重ねていく秀彬の、中年までの生活が描かれます。

その後の第三作の作品として、『楠都』での、秀彬の高齢になるまでの日々が描かれます。著者の、秀彬に寄り添った物語は、そこまで続く予定です。第二作と第三作が一緒になるかどうかは、今後の検討次第です。

四五 私たちが今回の生で与えられた人生は、取り換えの利かない重要な、一回限りの人生です。泣いても叫んでも、やり直しの利かない、人生です。悔いのないように、やりたいと思われることを感性から湧き上がってくるものを元に、決意をもって、やり抜かれるように祈っております。読者の皆様も、各自、重大な決意を胸に、ご研鑽を続けられることを、願っております。著者も死というゲートを通してまで研鑽を続けます。

まえがき（終わり）